

基調講演 歴史的環境の保存 9

文化財保存修復学会会長 / 日本大学 三輪 嘉六
文化財保存修復学会の活動 / 生活環境と歴史環境のつながり /
歴史的環境の保全は精神生活の保全 その道程

特別講演 歴史と環境 18世紀後半の北半球における「小氷期」現象の例 13

京都造形芸術大学 芳賀 徹
1786年ころのスペイン ゴヤ『寒波』 / スタロンパンスキーによる『寒波』の解釈 /
1789年のパリ ベルナルダン・ド・サンピエルの観察 / 1750年代から1780年代の江戸と関東 /
杉田玄白の『後見草』における記述 / 1783年夏のイギリス ギルバート・ホワイトの博物誌 /
18世紀におけるヨーロッパ諸国と日本 / 歴史の宇宙船史観

主に遺跡の復元活用に関連して 文化財観光資源と環境 27

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 田辺 征夫
はじめに / 文化財の観光資源としての価値 / 観光資源としての文化財とその復元 /
文化財をとりまく新たな社会環境 / 観光資源化による悪い環境 / 明日香村の問題 /
目でみる平城宮跡の復元史

京町家の保存と再生 世界遺産京都の歴史的環境と景観論争 35

京都府立大学 宗田 好史
京都にとっての環境問題 / 都市計画と町家の分布 / 町家の分布状況 /
町家の類型化による都市計画への応用 / 町家の利用形態と保存法 / 町家保存への市民の取り組み道 /
町家の生活環境を伝える / 町家の再生と新しい活用法 / 町家のピラミッド構造 /
京都市での新しい取り組み

美術工芸品の修復をささえるもの 伝統的修復技術を取り巻く環境 51

京都府教育庁 石川 登志雄
伝統的な保存・修復をめぐる環境 / 伝統的修復技術保持者の現状 / 表具用古代裂の製作 /
文化財修理にあたる修復技術者 / 修理時の温湿度や生物被害などの保存環境 / 修理費などの経済状況

「文化財の保存と修復」公開シンポジウム実行委員会

委員長：三輪 嘉六 副委員長：村上 隆
委員：西浦 忠輝、杉山 真紀子、村田 忠繁、内田 俊秀

人類の責任で解決を **地球規模の気候変動と歴史遺産** 59

独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所 西浦 忠輝

はじめに / 地球温暖化のメカニズムと現状 / 地球温暖化への対応策 / 歴史遺産への影響と対応策 / 結び

大気汚染から文化財を守れ **世界遺産奈良の大気環境** 71

奈良大学・同大学院 西山 要一

東大寺大仏殿八角灯籠の損傷 / ヨーロッパ・アジアにおける大気汚染による文化財の損傷 / 日本における大気汚染による文化財の損傷 / 世界遺産「古都奈良の文化財」の大気環境 / 金属板の大気曝露調査 / 校倉・原生林・伝統行事の大気汚染防除と文化財保存の効果

美しい街の再生と創出 **災害と歴史遺産** 81

京都造形芸術大学 内田 俊秀

自然災害と人的災害 / 被災した歴史遺産の救援活動と保存修復作業 / 阪神・淡路大震災での事例 / アッシジの復旧活動 / サラエボの現状 / おわりに

パネルディスカッション 91

コーディネーター 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 村上 隆

明日香村にみる遺跡の保存と観光資源化 / いつの京の町並みを残すのか / 多様化し変化しつつある観光行動 / 建物の機能をどう復元するか / 伝統的な技術をどう保存するか / 修復材料確保の問題 / 伝統技術とハイテクの導入 / 伝統的な保存方法から学ぶ / 文化財をとりまく環境変化 / 地震発生後の文化財保存修復学会の対応 / 若い方が取り組むべき道は多い / ローマにみる町並み保存の歴史 / 予防措置としての修復 / 文化財保存のための大気環境基準の制定を / 保存・修復科学の研修の場を / おわりに

CONTENTS

歴史遺産と環境

文化財の
保存と
修復

私が京都・北白川にある京都造形芸術大学に勤めた最初の年に、文化財保存修復学会の第21回大会が、私どもの大学にある歴史遺産学科のなかの文化財保護修復コースの教授である内田俊秀先生と岡田文男先生が担当されて、開催されました。私は出張中でその学会に参加することができませんでしたが、本日は、基調講演の演者としてここにお招きいただき、たいへん恐縮しております。

私は歴史に興味をもち、また環境問題にも関心をもっています。しかし、特に文化財保存に関して考えたことはありませんでした。本日の話は歴史に関するものですが、歴史遺産にはどれくらい関係するか少しおぼつかないところです。とにかくまず、18世紀後半の日本とヨーロッパについて比較してみようと考えました。

1786年ころのスペイン ― ゴヤ『寒波』

18世紀後半から19世紀初めにかけてのスペインの画家、ゴヤが『寒波』という有名な油絵を描いています(図1)。現在、マドリッドのプラド美術館が所蔵していますが、縦2m75cm、横2m93cmという大きな絵です。ゴヤが40歳のころ、1786年から87年、あるいは87年から88年にかけて制作したといわれている『四季』の連作のなかの1枚です。これほど厳しい寒さを絵にした作品は、世界にも例がないと思います。

学会の方々にご覧になっていただきたいのですが、寒冷期、小氷期ともいわれたりするような寒い季節が、どれくらい絵に描かれて残っているのでしょうか。これから、ときどき思いだして探っていただきたいと思いますが、ゴヤの絵は、ひとつの極端な、そして見事な例だと思います。

ゴヤは1746年に、バルセロナより北に位置するアラゴン地方のサラゴッサで生まれました。私はずっと昔、初めてスペインを旅行したとき、パリからトゥールーズ、ペルペニャンなどを経てバルセロナにいき、バルセロナから北上してサラゴッサの町を通過してマドリッドにいきました。当時はサラゴッサの近くの小さな村がゴヤの故郷だとは知りませんでした。しかし、今でも、まことに荒涼とした風景が印象に残っています。アフガン戦争の報道で写しだされるような、ほとんど裸の山と野原、荒涼たる砂漠や岩山のような感じの景観がアラゴンあたりに続いていました。その故郷の記憶もあって、ゴヤは『寒波』を描いたのだと思います。



図1 冬(寒波)(1786～87年、カンヴァス、油彩、275×293cm、マドリッド、プラド美術館蔵)

背景にはアラゴン地方の山が描かれ、そこからピレネーおろしが吹きつけてくるなかを、農民が3人、頭から頭巾をかぶり、毛布か南京袋のようなものを羽織っています。もうひとり、小さな口バを牽く男がいます。その口バには、同じぐらいの大きさの殺された豚がつけてあります。貴重な食糧として村に運んで帰るところかもしれませんが、先頭には鉄砲を抱えた猟師のような男がひとり、寒さに逆らいながら進んでいます。この農夫3人の前に、尾をまいて寒そ